

離人神経症1例であり、15例中8例までが、内科からの紹介患者であった。

ロールシャッハ・テストの結果から、内面的精神活動のエネルギーの低さ、要求水準の高さ、現実適応力の高さ、常識性の保持が示唆された一方で、より自己中心的で欲動優位な傾向を持ち、内面的な欲動に振り回されて外界刺激との適切な距離のとれなくなる側面がみだされた。すなわち、のびやかさを欠き、思考の幅が狭く、高く社会化された人格の上層を持ちつつも、人格の一部にコントロールされにくい欲動を抱えているという二重構造が考えられた。ロールシャッハ・テスト上にあらわれた防衛機制では、まずうつ病と診断された例では抑圧もしくは抑圧不全を基調としており、敵意や依存欲求が反動形成されていた。次に不安神経症では分離を用いて感情閉鎖を試み、そこに合理づけを伴っていた。更に、うつ病、不安神経症、ヒステリーと診断された中で、身体症状を伴うものでは投影の機制が用いられる傾向が認められた。

これらの結果をまとめてみると、

1. 現実適応力は有する
2. 依存欲求をめぐり ambivalent である
3. 攻撃感情にまつわる衝動が control されにくい
4. 抑圧・反動形成が主防衛

である。

内面的な深まりを欠いた状態で、高い要求水準のもとに、いわば仮性適応してきた本症例群の姿が浮かびあがってくるものと思われる。ライフサイクルの中での中年期以降の発症との関連や、うつ病群、正常群との比較などにつき、今後症例数を重ね、尚詳細な検討を行ってゆきたいと考えている。

5) ロールシャッハテストからみた

強迫神経症

一性格とその防衛機制について一

星 敬子・出江 一枝 (新潟大学精神科)
中村 協子・七里 佳代
橋 玲子 (新潟大学保健管
理センター)

今日まで、強迫神経症者のロールシャッハテストに関して、Rorschach, Schafer, 馬場, 成田らによる報告をみるだけでその数は比較的少ない。そこで、今回、我々はロールシャッハテストの量的分析と防衛機制から強迫神経症者の人格特徴を検討したいと思う。

対象者は、昭和44年から昭和62年までの間に当大学精神科と松浜病院外来を受診し、強迫神経症もしくはその

疑いがあるとされてロールシャッハテストを実施した72名(男子44名,女子28名)、年齢は14歳から67歳までである。

まず、ロールシャッハ反応の体験型に基づいて対象者を第Ⅰ群から第Ⅳ群に分類した。第Ⅰ群は人間運動反応と色彩反応共に多い両向型、第Ⅱ群は人間運動反応優位の内向型、第Ⅲ群は色彩反応優位の外向型、第Ⅳ群は人間運動反応と色彩反応共に乏しい両貧型である。次に、72名全員の治療経過をカルテにより調べ、その結果強迫神経症と確定された24名を本研究の対象とした。対象者のうち第Ⅲ群が11名と最も多くみられた。

以下、24名のロールシャッハテストによる量的分析について述べる。

まず、最も出現率の高かった第Ⅲ群の特徴は、外界の刺激に引きずられやすく情緒面で不安定であるが、常識に頼り、対人関係を避けることで安定を得ようとしていることである。これまで強迫神経症者には人間運動反応優位の者が多いといわれていたが、馬場らが指摘したように、我々のデータにおいても色彩反応優位の強迫神経症者が多くみられた。

次に、第Ⅰ群においては、第Ⅲ群と共通する部分が多くみられたが、第Ⅲ群と異なる点は、より葛藤的ということである。

第Ⅱ群においては、内部の衝動と外界の刺激を過剰に統制し、完全主義という従来指摘されていた強迫性格者の特徴が窺われる。

最後に第Ⅳ群においては、刺激そのものを避け、対象との関わりは受身的、表面的といえる。従って、この群は他の群に比べて未分化で未熟な人格構造のように思われる。

次に、各群の防衛機制の違いについて検討する。

第Ⅲ群においては、分離—合理づけが圧倒的に多く、その他、抑圧—合理づけがみられた。このことより、外界の刺激に引はられ混乱するが、その混乱した感情を分離という防衛で安定させようとし、さらに合理づけで強化をはかることが窺われる。

次、第Ⅱ群においては、分離—投影が特徴的で、これは観念優位で現実を主観的に解釈しやすい内向型の特性から考えれば了解できる。

第Ⅰ群においては、分離—合理づけ、分離—反動形成、投影が特徴的で、このタイプは第Ⅱ群と第Ⅲ群の特徴を合わせ持っている。

最後に、第Ⅳ群においては、抑圧不全が目立つ。これは反応拒否という形で出てくるものであり、従って、特

定の防衛機制をとりきれず、刺激をただ回避することで自己の安定を保とうとしていることを表わしている。このことは量的分析でも述べたように、人格構造の未分化さ、未熟さと関連があると考えられる。

6) 急性アルコール幻覚症の1例

藤田 菜生・富樫 俊二 (新潟大学精神科)
飯田 眞

アルコール幻覚症は、その発生機転及び疾病論的位置づけ、特に分裂病との関連に於て古くから議論の多い特異な病態である。今回急性アルコール幻覚症の典型例と考えられる一例を経験したので報告し、分裂病との鑑別の観点から若干考察する。

〔症例〕症例Mは34才男性で十数年来の大酒家であり、今回初めて幻覚妄想状態を呈した。

家族歴) 実父・養父共に大酒家である。母は一家の大黒柱で、Mに対し過干渉傾向がある。Mの両親は、Mが3才時離婚し、以後、養父、母、姉、Mの4人家族。

生活史) MはS28年、新潟に出生した。Mが3才時より18才時迄、一家は札幌で暮したがMの高校卒業を前に夜逃げ同然で新潟に戻った。Mはまもなく単身上京し、某新聞社準社員となった。29才時、人員整理が近づくと自ら退職し、職を転々とした後、31才時より無職でいた。それ迄小遣いを送っていた母に無職である事を知られ、帰郷させられたが、その後発症迄の2年間も無職のままであった。Mの酒量は増え毎日日本酒にして一升程のアルコールを摂取していた。

性格) 自己不確か性が高く、現実回避傾向、自己本位な点特徴といえる。Ror. では Psychotic sign は認められない。

現病歴) MはS62年(34才時)春頃より求職活動をする為、昼間は節酒するように努めたがままならなかった。春頃Mは階下に住んでいる従姉夫妻の娘の下着を盗んだ。7月初めより強い不眠が出現した。又、下着泥棒のことでMを処分しようと相談する従姉夫婦の声が聞こえた。さらに外出時、私服警官に追跡されているような気がし、彼らの相談する声やスピーカーでMに呼びかける声が聞こえたという。警察に駆け込んだり、盗聴器を捜す等の異常行動が出現した為、母に連れられて当科初診、即日入院となった。異常体験の出現から入院まで10日間であった。

入院後経過) ハロペリドール1日3mg投与した。入院後は幻聴は認められず、妄想も疎隔化していった。その為入院2週間後より抗不安薬のみの投与としたが、3ヶ

月経過し退院した現在も症状の再燃はみられていない。

〔考察〕スラヴィッツ(1980)による本症と分裂病との鑑別点を参考に、本症例の診断に際してもまず分裂病を除外した。

又本症例を、分裂病との移行の観点からの齊藤(1985)による分類に照合し、急性アルコール幻覚症典型例と診断した。

しかしながら、本症の慢性化例の中には分裂病と鑑別し難い症例や、発症状況に着目すると種々の精神病がアルコールの修飾をうけて発現してきたと考えられる例もある。このような中でアルコール幻覚症の診断を進めていく為には、細分類しそれに照合することも重要だが、上掲の各点を中心に、様々の角度から詳細な検討を重ねることが必要であろう。

7) 非定型精神病像を呈した一卵性双生児不一致例

中村 秀美・富樫 俊二 (新潟大学精神科)
飯田 眞
小川 正裕 (新潟信愛病院)
橋 玲子 (新潟大学保健管理センター)

非定型精神病像を呈した当時27歳男子の一卵性双生児不一致例について発達史、生活史の双生児間の比較を中心に検討した。病像を呈したのは双子の兄Aであり以下弟をBと呼ぶ。卵性診断で一卵性双生児と判定されている。双子の父はうつ病の既応があり母には幻覚妄想を主体とした非定型精神病の既応がある。乳児期双子はBがAより劣っていたため母の愛情はBにより多がれていた。一才以降双子は父方の祖母の養護のもとに置かれたがその祖母の目にはAが「優しく素直な子。」Bは「口答えする我がまな子。」として写っており幼児期よりBはAよりやや我がまに自己を表出していたことが伺えた。更に思春期に至ってBはAに比し友人との係わりの上でより対人的な外向性を発達させていった。また生活環境の上でも高校卒業を境に双子に大きな相違が認められた。高校卒業時BはAより成績で劣りながらも進学という欲求を認められ家から離れたがAは長男という役割から進学という欲求を自ら抑圧し家に留まり就職した。

双子は内気で神経質という共通した性格構造を有しているものの発達史からBはAに比し自己表出や対人外向性の面でより成熟していることが明らかとなった。

AはBが家を離れた後2回発病している。いずれの病像も躁病様の観念奔逸性錯乱、易刺激性、誇大妄想が主体であったが初回病像には短期間の幻聴、幻視、被害妄